

化床に伏せ込むが、秋に仮伏せしておいた根株を掘り出し、ミツバの古い茎葉を取り除き、根に着いている土はよく落とし、根もとをよく揃えて軟化床に直接伏せ込むか魚箱に詰めて軟化を行う。

根株に土が着いていると軟化中に根の通気性がわるく失敗することが多いので注意する必要がある。

つぎに根株の伏せ込む量、時期に差があると萌芽の揃いがわるくなるので、均一に萌芽するよう熟練した人で均一な作業を行うようにする。

(10) 温度管理

伏せ込み後、萌芽するまでの5日間ぐらいは23°C内外で管理し、その後ミツバの草丈が10 cmぐらいまでは18~20°C、その後は15°C前後で管理する。

ミツバの軟化は温度を高くすると菌核病、根ぐされ等が発生するので、軟化中の温度はいく分低目にして日数をかけて軟化をする。

灌水は毎朝行うが、軟化床の温度が低いときには温水をかけ、温度が高いときには毎日行う灌水量の加減によって温度調節をする。

ミツバの色づけは伏せ込み後10日目ころから徐々に行う。

ミツバの草丈が10 cmぐらい伸びたならば、日中はハウス内全体を暖房機で暖め、軟化床の障子はずしミツバに光線をできるだけ多く当て早くから葉に色を着けるようにする。

このように早くから葉に色着けをすると軟化中に病気にかかりにくく、日持のするミツバチが軟化できる。

伏せ込み後30日ぐらいで草丈が30 cmぐらいに伸びたところに収穫する。

札幌における選別は、株元についた黄変した葉、細く短い葉はすぐって、ゴム輪で50 gの小束にして20束をミツバ専用のダンボール箱に詰めて出荷する。

切りミツバはよい温度管理をすると2~3回収穫することができるが、最初の軟化のときに高温で軟化すると根がいたみ2回目の収量が著しく減少するので、必要以上の温度で軟化しないようにすることがたいせつである。

《ルポルタージュ》 上土幌大規模草地 を訪れて

——草地の現況について——

雪印種苗KK札幌研究農場

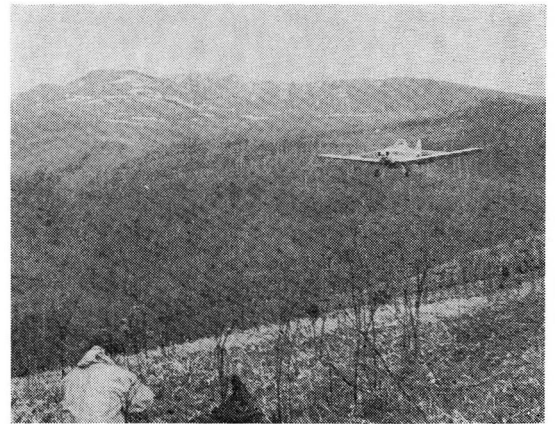
山下太郎

昭和48年7月初旬、昨夜からの雨はあがっていたが、雨雲が低くたれこめ、大雪山系へ連なる上土幌(山岳)大規模草地は、基地周辺部をのぞいて霧にすっぽりとざされていた。

アルピニストの若き伊藤場長より、牧場の概要についてお話を伺い、草地を案内していただく。

霧の中でチョッパー収穫を行なっている大型機械のエンジン音が不気味にこだまする。詩的な静かなたたずまいを破るこのエンジンの音が適期収穫をしなければ良質牧草を生産・利用できないこと、更に良好草地として維持・管理するためには、天候はある程度無視しても作業を消化せねばならない大規模草地の草地マネジメントの難しさを象徴しているように思われた。

上土幌大規模草地は、昭和41年~47年に亘って北海道開発局が十勝中部地区国営大規模草地と

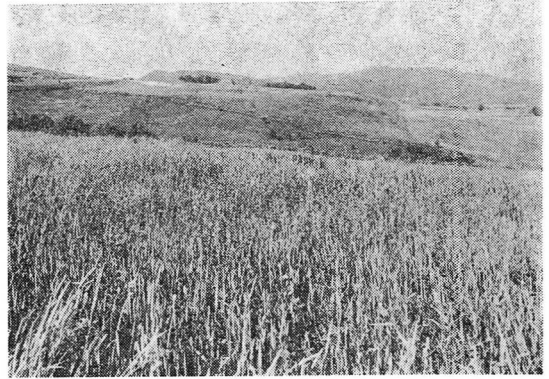


昭和41年、航空機による播種試験
(山岳草地であることと原植生がわかる)

して造成を行い，その間道が受託管理を行い，昭和47年度より町営育成牧場として上士幌町が運営管理を行ってきた。

造成段階より再三訪れており，草地内を一人歩きすることを許していただき，主として経年草地の植生状況の変化——草地の生産性，草種混生割合，標高差による草生の違い，等——について調査したいと思った。しかし面積1,000 ha，標高1,000 mに近い大規模草地においては，自動車で走りまわるだけで精一杯であった。おりから帯広畜産大学の福永助教授が試験圃の調査にいらしており，いろいろお話を伺い，改めて問題の難かしさを知ることができた。従ってここでは大規模草地の現況を写真を主体に報告するにとどめたい。

深くたれこめていた霧も正午近くになって徐々

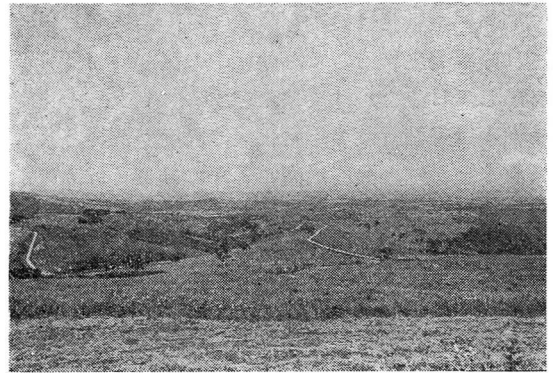


中間台地の兼用草地

多種類混播の草生が維持されている。標高差による早晚生の差はあまり期待できないとの話であった。



チョッパーによる牧草の収穫
中央が伊藤場長



中間台地より低地草地及び十勝
原野をのぞむ

低地より中間台地の草生産性が高い，これは利用年限と土壌の違いに起因する。



山頂部の放牧風景
蹄耕法による簡易造成草地

パーズフットトレフォイル，ペレニアルライグラスは衰退してきている。



播種後10年を経過した兼用草地

赤クローバは衰退しているがラジノクローバが適正なマメ科率を維持していると思われる。

にあがり眼下には広大な十勝原野がひらけ、山頂まで続く緑の草地は流れゆく霧とコントラストし、はいつくばるような無数の牛群がけわしい山頂の斜面にあらわれた。朝訪れた時の農業の自然的困難性にかわって、天にも昇るようなこの自然と一体の農業になににもかえがたい素晴らしさを感じた。

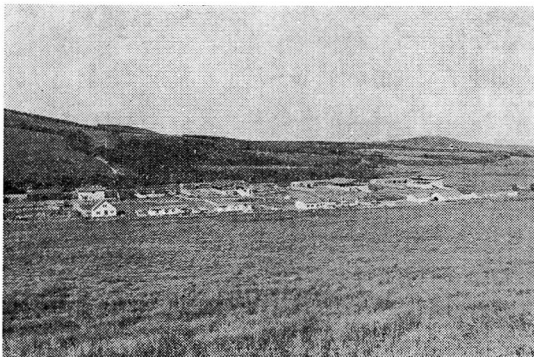
長雨がが続いていた関係で、採草地はやや刈遅れ



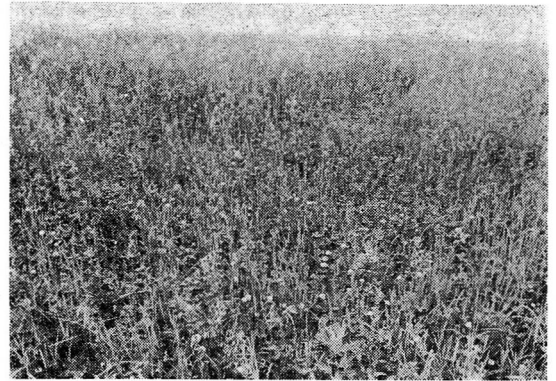
帯広畜産大学草地学科生態学研究室の
現地試験圃及び調査風景

昭和37年からの調査計画段階より現地試験を行っており、当大規模草地はもとより、多くの大規模草地の造成・管理のうえで貴重な資料成績として大きな影響を与えている。

の感はあったが、マメ科草（アカクロバ）の混生割合が高く、イネ科草ではオーチャードグラス、チモシー、メドウフェスクが良く共存していること、総じて多種類混播の良さが発揮されていることが、草地の現況として強く印象に残った。



上士幌大規模草地基地全景



多種類混播草地の現況

アカクロバの混生割合が高く、チモシー、オーチャード、メドウフェスクが共存している。

上士幌大規模草地の混播組合せと播種量

兼用草地

赤クロバ（ハミドリ）	5.0
オーチャード（マスハーディ）	7.0
チモシー（クライマックス）	7.0
メドウフェスク（普通種）	7.0
ラジノクロバ（カリフォルニア）	4.0
計	30.0(kg/ha)

放牧地（機械造成）

オーチャード（マスハーディ）	7.0
白クロバ（ニュージーランド）	3.0
パーズフットトレフォイル（エンパイア）	3.0
メドウフェスク（普通種）	5.0
ペレニアルライグラス（普通種）	7.0
ケンタッキーブルー（普通種）	5.0
計	30.0(kg/ha)

放牧地（簡易造成）

（蹄耕法）	
白クロバ（ニュージーランド）	3.0
パーズフットトレフォイル（バイキング）	3.0
オーチャード（マスハーディ）	10.0
メドウフェスク（普通種）	6.0
ケンタッキーブルー（普通種）	3.0
ペレニアルライ（普通種）	5.0
イタリアンライ（マンモスB）	3.0
計	30.0(kg/ha)